



Title	イコノクラスムの時代について : 八世紀のビザンツ
Author(s)	中谷, 功治
Citation	待兼山論叢. 史学篇. 1992, 26, p. 63-87
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/48063
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

イコノクラスムの時代について

——八世紀のビザンツ——

中 谷 功 治

一 はじめに

ビザンツ帝国の歴史を語る際に、テマ制と並んで必ず取り上げられる話題にイコノクラスム、いわゆる聖像破壊をめぐる論争がある。ここでいう聖像とは、キリストや聖母あるいは聖人たちの木の板や壁面などに描いた独特な画像一般を指す。しかし、イコンは単なる宗教画ではない。一定の様式を持って描かれたイコンとは神聖な存在であり、神に近づくために敬うべき信仰の象徴であった。今日のギリシアやロシアをはじめとする東方の正教会において、イコンは信仰上欠かすことのできない精神的な支えとなっている。⁽¹⁾

ビザンツ以来の「正統」教会の立場からは、このようなイコンには「聖画像」とでも訳すべき特別な意味が込められている。それだけに、聖なるイコンを破壊する行為、すなわち「聖画像破壊」はキリスト教の信仰そのものへの挑戦として敵視された。他方、イコンの排除を目指す側からすれば、神が不可視である以上、イコンとは人間を

描いた絵画に他ならず、そのような画像に礼拝したり奇蹟を求めることは、旧約聖書においてモーゼの第二戒が禁じている「偶像崇拜」に当たる恐るべき行為と映ったのである。⁽²⁾

七二六年、突然皇帝がイコンを排除する措置に踏み切ったことからイコノクラスムは始まる。この運動は、イコンに関する神学理論が確立されていなかったこともあって帝国内に激しい論争を引き起こし、一時的なイコン復活期(七八七―八一五年)を間にはさみつつ、八四二年に至ってようやく終息を見た。皇帝の治世でいうと、第一期がシリア朝のレオン三世・コンスタンティノス五世・レオン四世の三代、さらに九世紀に入ってレオン五世・ミカエル二世・テオフィロスのやはり三代の第二期、合わせて約一二〇年弱に及ぶ。

ビザンツ史の概説書では、七一七年のレオン三世の登極から八四二年のテオフィロス帝の死までの一世紀余を「イコノクラスムの時代」と呼ぶのが通例となっている。⁽³⁾確かに、帝国はレオン治世始めの第二回首都攻防戦に勝利して本格的な国家再建に乗り出し、九世紀後半には強力な軍隊と官僚組織を備えた強国として東地中海世界に再登場している。また、「マケドニアールネサンス」と呼ばれる文芸の復興が本格化したのもこの時期を経た後のことである。その意味では、この時代区分は一応妥当なものといえよう。

けれども、この時期を「イコノクラスム」という宗教上の一論争によって定義することは、帝国史の時代区分においてやはり特異な例というべきである。信仰にかかわるテーマによって時代を規定するといったことは、帝国史の他の時期には見られない。この時代に「イコノクラスム」という名前を冠するのであれば、この運動が単なる宗教問題の域を越え、より広い意味で当時の帝国の政治・経済・文化など各方面に多大な影響を及ぼしたことが証明されなければならないだろう。

本稿の目的は、時代区分そのものではなく、この時期全体を統括する用語としてはたして「イコノクラスム」は適切かどうかを検討することにある。当然、宗教論争をもとにした時代の把握にも一定の理由が存在するに違いない。けれども、それらは必ずしも妥当とは言えない、いやむしろこの時代を明確に理解することの妨げにさえなっている、というのが筆者の考えである。

二 問題の所在

イコノクラスムをめぐる本格的な学問研究はすでに一世紀以上の歴史を持ち、関連する文献の数も膨大でかつ多方面に及んでいる。ここで研究史全体を振り返ることは、紙幅の都合もあってほとんど不可能である。⁽⁴⁾けれども、イコン論を中心とする神学や教会史としてイコン自身を対象にした美術史の研究をひとまず置き、⁽⁵⁾歴史研究のみに焦点を絞るならば、前世紀以来の成果はG・オストロゴルスキーの『ビザンツ国家史』をはじめとする六〇年代の概説書にまとめられている。そして、これらを受ける形で、七〇年代に研究は一挙に活況を呈し、ほぼ現在の研究状況ができあがったといえるだろう。

七〇年代に発表された多くの研究の中でも、まず第一に注目すべきはS・ゲロウの二著書と一連の論文である。ゲロウは従来ギリシア・ラテンの文献だけでなく、アラブ・アルメニア・グルジア・シリア語などの東方史料を初めてオリジナルな形で利用し、厳密な分析を加えた。彼の議論は明快でイコノクラスムに関係する広範な諸問題を扱っており、現在イコノクラスムを考察しようとする者の必読文献となっている。⁽⁶⁾

ここで戦後の研究史をあえて整理するならば、歴史研究については次の三つにまとめられるだろう。(一)イコンへ

の攻撃はなぜこの時期に生じたのかを問う原因論、(二)この運動の地域性そして主な担い手と反対勢力の究明、そして(三)西方とりわけローマ教皇庁との関係、である。また研究を時期的に見た場合、その大半はイコノクラスムの第一期に向けられている。第二局面は前期と比較して迫害の規模や内容面で緩やかであり、神学論争においても七五四年の公会議の決定事項を越える議論は展開されていない。このような理由から、イコノクラスムの典型として第一期が考察の中心となる傾向が強い。本論でも、考察の対象は原則として第一局面を含む八世紀に重点を置くこととする。⁽⁷⁾

前述の三つの中心課題の内、第一の原因論については、これまで提起されてきた諸説はゲロウによって最終的に批判された。現状では、レオン三世個人の信仰心以外にはイコノクラスムの勃発について明確な理由を求め得ない、といういささか消極的な定説が確立された感がある。また、第三の西方ローマとの関係について言えば、どうしても教会史や教義上の議論が中心となりがちで、また個別的で詳細な研究が目立っている。

歴史学からのアプローチは、あくまでも具体的な歴史過程を対象としながら、論争が当時のビザンツ国家や社会にどのような影響を与えたのかを重視する傾向がある。この点で多くの研究者たちを引き付けてきたのが第二の課題、イコノクラスムの社会的背景であり、とりわけこの運動の推進派と擁護派の分類に関心が集中することになった。手がかりとなるのは、イコノクラスムの持つ地域性と主たる担い手についての考察である。

地域的傾向としては、概してイコン破壊派は小アジア地方に多くみられ、これに対してイコン崇敬派の拠点はバルカン・ギリシア地方さらにローマ・西方世界にあったという。つまり、イコンをめぐる論争は首都コンスタンティノープルをはさんだ東西の地域を対抗軸として展開されたのである。さらに、特定の社会階層との結び付きにつ

いても一定の傾向が見られたという。イコノクラスト皇帝の手足となって迫害を推進したのは軍隊、とりわけ小アジアのテマ軍団であった。他方、このイコノクラスムの犠牲者の中でも特に厳しい迫害を受け、多くの殉教者を出したのが修道士であった。信仰に対して最も厳格で信条を曲げなかった修道士たちは、運動の格好の標的にされたというわけである。まとめると、(一)西方イコン崇敬派對東方イコノクラスムの地域的な対立、(二)軍隊のイコノクラスム的性格と修道士たちのイコンへの熱狂的な支持という図式となる。⁽⁸⁾

このような東西対立や社会階層的区分をめぐる所説こそ、この運動が単なる宗教論争に留まらず広く社会的な背景を備えていた、という歴史的なイコノクラスム理解の根幹をなすものと言える。ところが、七〇年代以降の研究動向に立脚する限りでは、イコノクラスムの社会背景・迫害の規模など、通説的な理解を否定する議論が優位を占めている。はたして、国内あるいは対外的な事件は、イコン論争という見地からうまく説明しえるのであろうか。本稿では、以下イコノクラスムをめぐる地域的対立および社会の特定階層との結び付きを中心に考察していくことにする。

本論に入る前に、史料について一言述べておきたい。いわゆる「イコノクラスムの時代」は史料的には暗黒時代に当たっている。以下での考察において主要な史料となるテオファネス・ニケフォロス両年代記⁽⁹⁾、そして関連する聖者伝史料等をあわせても決して満足のいくものではない。さらに注意を要するのは、現在われわれが利用できる史料は全てイコン崇敬派の手になっていることである。非難論駁を目的にした引用を除けば、イコノクラストたちの主張は一切窺い知ることではできないのである。したがって、史料全体がイコノクラスト批判のために著しい改竄あるいは偏向を受けている可能性を多分に含んでいる。実際、年代記などを読み進むと、様々な出来事が反対勢力

を誹謗中傷するために利用されていることが判明する。

本来は無関係な事件がイコノクラスムに結び付けて説明されるこの過程を、P・シュライナーはイコノクラスムの「伝説化」と呼んでいる。⁽¹⁰⁾ 例えば、テオファネス年代記ではレオン三世がイコン非難を開始したとき、知らせを受けた教皇グレゴリウス二世は直ちに実力行使に出て、ローマとイタリヤからの租税支払を拒否したという。これに対し、レオンもシチリア島・南伊カラブリア地方への税を増額、バルカン半島西部のイリュリウム地方ともども教会の管轄をコンスタンティノープルに移すなどで応酬したとなる。⁽¹¹⁾

ところが、事実はいささか異なっていた。教皇側の史料『教皇列伝』は、租税引き上げとその直後に起こった反イコン宣言とを区別して述べているのである。恐らく、対アラブ向けの戦費を捻出するため皇帝が租税を引き上げた際に、教会領に例外が認められなかったことから教皇の反発を招いたというのが実際の経緯だったようである。⁽¹²⁾

この例に典型的に示されているように、イコン論争とは直接関係しない事件がイコノクラスムを通して説明される傾向は他にも多く見られる。われわれはこのことを十分念頭に置いた上で史料を読む必要があるだろう。

三 地理的要因と軍隊

本章では、西方のイコン容認対東方のイコノクラスムという地理的な対抗図式、P・シュペックが皮肉を込めて「イコノクラスムの地理学」と呼ぶものについて検証する。その際、地域対立説を裏付ける証拠として重要視されてきたのが小アジアのテマ軍団であったから、反乱を中心とするこれら軍隊の動向についてもあわせて考察することにしたい。⁽¹³⁾

七二六年の皇帝の反イコン宣言⁽¹⁴⁾に対し、すぐに抵抗の狼煙が上がった。翌年春「神聖なる熱意に駆り立てられたヘラス・テマ軍団とキュクラデス諸島の人々が、彼（レオン三世）に対して蜂起した⁽¹⁵⁾」という。このテオフアネス年代記の記事からはイコノクラスム政策と反乱の因果関係は曖昧であるが、ニケフォロスでは「この（皇帝政策の）ために、ヘラスとキュクラデス諸島の住民たちは、神を無視した態度に我慢できず、皇帝に対して蜂起した」と明確に二つの事件を結び付けて述べている。⁽¹⁶⁾

東西対立説から言えば、イコノクラスムの開始に対したちにヨーロッパ側から反乱が起こったことになる。けれども、このヘラス・テマの反乱は本当にイコノクラスムが原因だったのだろうか。以下に見るように、テマ反乱の大半はイコノクラスムのみから説明するにはかなり無理があるし、またテマ軍による反乱を民衆蜂起とするイコン擁護派の年代記の記述には、シュライナーの指摘する「伝説化」の傾向が強く感じられる。やはり、不用意に両者を結びつけることは謹まねばならないのではないか。ここでは、「イコノクラスムの地理学」を積極的に展開しているH・アールヴェレル自身が、この反乱は反イコノクラスムというようもむしろ海上貿易からんだ皇帝の通商政策への反発であった、と述べている点に注目しておきたい。⁽¹⁷⁾

七四一年、レオン三世が死去すると、彼のかつての同僚で娘婿でもあるアルタヴァアスドスが反乱を起こし、レオンの息子コンスタンティノス五世との間で一年以上にも及ぶ激しい内乱が続いた。都に入り帝冠を受けたアルタヴァアスドスはただちにイコン復活を宣言する。かつてのレオンの片腕の人物がイコノクラスムを停止しようとしたことは特筆すべき事件である。⁽¹⁸⁾

この事実からは、論理的に次のような推論が成り立つはずである。すなわち、アルタヴァアスドスのイコン容認が

単にレオンの政策に対抗するためだけのポーズであった、あるいは逆に彼が本当は元からの熱心なイコン崇敬派であった、のいずれの場合においても彼や彼の指揮下にある小アジアのテマ軍団はイコノクラスムをさほど強力には推進しなかったであろう。いずれにしても、年代記の記述からは、イコンをめぐる議論が反乱の帰趨を決するような役割を果たしたとは思えない。

この反乱についてのもう一つ留意しておきたいのが、内乱過程での小アジアのテマ軍団の対立関係である。アルタヴァスドス（イコン派？）に付いたのはアルメニアコイ・オブシキオンそしてヨーロッパのトラキア、一方コンスタンティノス五世を支持した（イコン破壊派？）のは残りのアナトリコイ・トラケシオイ・キビュライオタイの各テマであった。ところが、興味深いことには八二〇年に勃発した大反乱スラヴ人トマスの乱において、イコン派を称したトマスを支持したテマとイコノクラスト皇帝ミカエル二世側に回ったテマの構成は、アルタヴァスドス反乱ときれいに逆転しているのである。⁽¹⁹⁾

エイレレーネーによる七八七年のイコン復活以後のテマ反乱についてはどうか。七九〇年、アルメニアコイリテマ將兵がエイレレーネーの支配に反旗を翻し、これに小アジアの他のテマ軍団が呼応して首都に圧力を懸けた。結果として、息子コンスタンティノス六世の単独統治とかつてのコンスタンティノス五世の片腕ミカエル・ラカノドラコン（後述）の復権が実現されたのだが、ここではイコノクラスムに関連した記事は一切言及されていない。コンスタンティノス六世自身、宗教問題には無関心であったとしか思えないのである。結局、その後もなお反抗を続けるアルメニアコイは、皇帝と残りのテマの連合軍によって最終的に鎮圧されている。⁽²⁰⁾

また、軍隊とイコノクラスムとの親和性を説く研究者たちが、イコン復活後のイコノクラストたちの拠り所とみ

なしたのがレオン四世の異母兄弟たちであった。実際、エイレーネーとコンスタンティノス六世の政権下、彼らを擁立しようとする陰謀が六度も計画されている。けれども、異母兄弟たちがイコノクラスムであったという証拠はない上、事件ごとに異母兄弟たちの支持者は変化しており、時にはヨーロッパ側のテマ⁽²¹⁾ヘラスが関与したことさえあったのである。

結局のところ、テマ反乱とイコノクラスムを安易に結び付けるのはかなり問題があるといえよう。そもそも、テマによる反乱は七世紀後半から九世紀前半まで断続的に繰り返されており、時期的にもイコノクラスムを越える現象だったのである。

もちろん、軍隊内部にイコノクラストが存在しなかったわけではない。とりわけ、地方のテマではなく首都にあった近衛連隊(タグマ)は皇帝コンスタンティノス五世の手足となって反対派弾圧のために活躍している。中でも、七八六年に首都の聖使徒教会で開催されたイコン復活のための公会議の議場に乱入し、実力をもって会議を解散させた事件は有名である。⁽²²⁾しかし、彼ら近衛連隊の兵士は元からイコノクラストであったわけではない。年代記も述べているように、コンスタンティノスが彼らに自らの信条を教育したのである。⁽²³⁾近衛連隊は筋金入りのイコン破壊派であったかもしれないが、それは宗教感情の地域的傾向とは無縁の、むしろコンスタンティノス五世への忠誠心から出たと考えたほうが自然であろう。

また公会議乱入事件に関連して言えば、翌年エイレーネーはテマの軍隊を用いて近衛連隊の武装解除を断行している。東西対立論者はこの時のテマとはヨーロッパ側の部隊であると繰り返し主張してきたが、テオフアネス年代記は彼らを「(首都から見て)対岸のテマ⁽²⁴⁾」とはっきり述べており、ここでのテマ軍団は明らかにトラキア側に移動し

ていた小アジアの軍隊だったのである。またしても、東方テマリイコノクラストの仮説は成り立たないことになる。最後に、イコノクラスムの迫害に地域的な傾向があるかどうかを確認するための貴重な情報がある。聖者伝史料『小ステファノス伝』の中で、この聖人はコンスタンティノス五世の追求を受けた仲間の修道士たちに迫害の及びにくい地方への避難を勧めている。ステファノスの言う地域とは、場所の厳密な確定作業には議論の余地を残しているが、はっきり言えるのはイタリアのローマ付近・黒海の北岸地域・バルカン半島西部のエピロス・小アジア南岸そしてキプロスなどであった。ここに言及された地方とは西方のみを示すものではなく、帝国の支配の不完全な辺境地域、追求の及びにくい場所にすぎない。

以上見てきたように、イコノクラスムに対する態度の地域的偏差や小アジアの軍隊のイコノクラスト的傾向を現存史料から確認することはできない。小アジアIIイコン破壊派、ヨーロッパ側IIイコン崇敬派といった安易な図式は根拠を持たないのである。もとより、この運動に地域的な偏りがなかったことが証明されたわけではないし、テマの兵士の中にイコノクラストがいたことも確かである。けれども、史料は全く断片的にしかな残存していないだけに、「イコノクラスムの地理学」を語る際には十分なまでの慎重さが不可欠となる。このような現状にもかかわらず、アジア側対ヨーロッパ側という区分けや、地域対立を前提とした演繹的な議論がしばしば見られるのである。

四 迫害の実態と修道士

前章では、イコン論争において帝国を東西に分けた地域対立が成り立たないことを検証したが、そこからは、はたしてイコノクラスムという運動は当時の社会にどの程度の影響を与えたのか、が改めて問題となってくる。そこ

で、本章ではこの論争から生じた迫害の実態を探ることにする。また同時に、通説において迫害の主な被害者とさされてきた修道士たちの態度や殉教の理由についても焦点を当てることにした。

七二六年、レオン三世は首都宮殿入口の青銅門に掲げられたキリストのイコンを撤去するよう命じた。これに憤激した首都の民衆は、皇帝の役人に襲いかかり彼らを殺害する。これに対して皇帝は暴徒たちを逮捕し、多くの者を切斷・鞭打ち・追放・罰金等の刑に処したという。けれども、事件を伝えるテオファネス年代記の記述には不明瞭な部分も多い。例えば、この記事のすぐ後の箇所において、彼は処罰された人々を「特に血統と言葉において傑出した者たち」などと呼んでいる。さらに、一〇世紀の教会暦になるとこの時の受難者一〇名が実名付きで登場するが、借用の多い記述は独立した史料とみなしえないというのが研究者の意見であり、シュライナーも「伝説化」の例だとしている。⁽²⁸⁾

また、続けてテオファネスでは「諸学校」が閉鎖され、コンスタンティヌス大帝以来の敬虔な教育に終止符が打たれたという。ところが、九世紀の『修道士ゲオルギオスの年代記』の中では、教師たちにイコノクラスムを強要しようとして拒絶されたレオンが、建物の中に彼らを集めて火を放って書物共々焼き殺した、と脚色されている。明らかに、これは後世のイコン崇敬派によって全く別の事件がレオンのイコノクラスムに帰された「伝説化」の典型例というべきであろう。⁽²⁹⁾

以上が、信用に足る史料が伝えるレオン三世のイコノクラスムの実体である。結局、レオンがなしたことは、宮殿入口にあるキリスト像の撤去、イコン禁止勅令の発布そして反抗する総主教ゲルマノスの解任くらいであった。それゆえ、シュライナーなどはこの時期のイコノクラスムは神学論争に終始していたのではないかとさえ推測して

いる。もちろん、年代記での「猛り狂った暴君は聖なるイコンへの迫害を強化した。多くの聖職者や修道士そして敬虔な俗人たちが信仰の正しい教えゆえに身を危うくし、殉教の冠を戴いたのである」というような漠然とした記述に全幅の信頼を置くのであれば別であるが。⁽³⁰⁾

イコン崇敬派への迫害、とりわけ修道士への攻撃が過酷を極めたのはレオンの息子コンスタンティノス五世の治世(七四一—七七五年)になってからである。けれども、最初に強調しておきたいのは、彼の治世でも六〇年代よりも前にはイコノクラスムやそれともなう迫害への言及がほとんどみられない、という事実である。⁽³¹⁾ コンスタンティノス五世は父以上に神学論争に熱心であり、自らイコン非難の冊子を著し、七五四年には首都郊外ヒエレイア宮において公会議を開催して公式にイコノクラスムを決議した。迫害の本格化はこれ以降の時期と考えていいだろう。⁽³²⁾

七六二年、コンスタンティノスは修道士アンドレアス・カリキュビテスをブラケルナエ宮の競技場にて鞭によって打ち殺させた。アンドレアスが彼を新しいアリウス派皇帝ワレンス、背教者ユリアヌスと非難したからである。⁽³³⁾ また七六八年には、皇帝の信条に服従しない柱頭修道士のペトロスを柱の上から引き降ろし、足を縛って町中を引き回して殺害し、さらに他の者たちは袋詰めにして重石を付けて海に投げ込ませたという。⁽³⁴⁾

最もよく知られているのが、ビチュニアのアウクセンティオス修道院の隠修士ステファノスの殉教である。七六五/六年、コンスタンティノスはステファノスを首都に連行・拘禁し、さらにやはり市中を引き回した上で四肢を引き裂いたという。多くの人々に修道生活を勧め、皇帝からの爵位や報酬を軽蔑するように説いたのが理由とされる。⁽³⁵⁾

ここで気になるのは、彼ら修道士たちの殉教の原因がイコン崇敬にあったのかどうかははっきりしない点である。

特にステファノスの場合には、政治的な陰謀事件との関連さえささやかれている。すなわち、彼の死の直後、一九名の高官たちが皇帝への陰謀のかどで競技場へ連行され、首相・近衛連隊長が斬首、テマ長官ら武官六名が盲目の上追放となった。さらに、処置の不徹底から市総督は鞭で打たれ更迭、皇帝の腹心であるはずの総主教コンスタンティノスまでもが陰謀加担のかどで追放され、その後斬首に処されている。⁽³⁶⁾

個人的な迫害以外に集団的な弾圧も伝わっている。同年、多くの将校や兵士がイコンを崇敬していると聞きつけると、コンスタンティノスは彼らに様々な処罰を加え、厳しい拷問で責めた。さらに、イコノクラスムを徹底させるため、彼は支配下のあらゆる人々に対しイコンを崇敬しない旨の宣誓を要求した。また、彼は修道士のライフスタイルを非難・侮辱し、修道院長たちを競技場に呼び出すと、各々に女性の手を取って行進するよう強要し、民衆の嘲笑の的にしたという。⁽³⁷⁾

地方での迫害については、小アジア西岸のテマ・トトラケシオンの長官、ミカエル・ラカノドラコンによる甚だ乱暴な措置のみが詳細に伝えられている。七七〇年頃、ラカノドラコンは皇帝を真似てテマの全修道士・修道女をエフェソスに集めて妻帯を強要し、拒否した者は盲目にしてキプロスへ追放した。また、翌年には全ての修道院を聖具ともども売却させ、書籍・聖遺物については見つけ次第焼却し、これらを隠匿していた修道士には盲目・拷問・追放・処刑などの嚴罰で臨んだという。また、何人かの修道士はその髭を焼かれ、テマ領内では修道士の服装一切が禁じられた。テオファネスは、他のテマ長官たちも彼に倣ったと述べている。⁽³⁸⁾

年代記が伝える修道士への迫害の概要は以上である。注意しておきたいが、これほどまでに狙い撃ちされた修道士ではあるが、彼らが皆イコン崇敬派であったわけではない。例えば、カッパドキアの礼拝堂には画像を伴わない

十字架の裝飾が残っているし、イコノクラストとして高位聖職者に就く修道士も存在したのである。九世紀初頭のニケフォロス一世の治下においても、ニコラオスという名のイコノクラスト修道士が登場する。⁽³⁹⁾

修道士たちへの恐るべき攻撃とは対照的に、より肝心なイコン破壊の事例はわずかしが残っていない。われわれが確認できる範囲では、七八七年ニケーア公会議の議事録の中で、総主教文書館所蔵の挿絵の付いた写本二巻が焼却、別写本の挿絵部分が削除、さらに小アジア西岸フォカイア市で書物四〇巻がやはり焼却された、との報告を挙げるくらいである。⁽⁴⁰⁾その他にも、小ステファノス伝では、ブラケルナエ教会の聖人たちのイコンが植物や野獣のものに置き代えられ、また首都の第一マイルストーン側の全六回の公会議の画像がはがされ、代わりに競技場の場面が描かれたというが、いづれも信憑性は決して十分ではない。⁽⁴¹⁾それだけに、首都の総主教宮殿内のイコンが撤去あるいは塗り込まれたのがようやく七六八年になってからであったという事実は、実際の運動がどの程度まで実施されたのかを考察する上で軽視できない。⁽⁴²⁾

コンスタンティノスの息子レオン四世はイコノクラストではあったが、修道士を迫害することはなかったようである。彼は迫害を緩和する一方、修道士を府主教などの教会の高位職に抜擢したという。彼の治世で知られている唯一の迫害例は、七八〇年にイコンを密かに隠匿、崇拜していた宮廷の宦官たち数名が処罰を受けた事件である。⁽⁴³⁾

ここで聖者伝史料についても少し触れておきたい。本稿での議論からも明らかなように、八世紀のイコノクラストムについて詳しく伝える史料は乏しく、それだけに聖者伝史料はこれらを補う意味からも注目されてきた。⁽⁴⁴⁾まして、八世紀末から九世紀がビザンツ聖人伝の黄金時代の始まりに当たっているとすればなおさらである。⁽⁴⁵⁾いわゆる「イコノクラスムの時代」の激しい修道士迫害は、聖人伝を執筆するにはおあつらえ向きの殉教の機会を提供していた。

しかし実際には、イコノクラスムによる迫害の具体的な情報を提供し、しかも史料批判に十分耐えられる聖人伝はごくわずかしか残っていない。特に第一局面を扱った作品は、I・シエフチェンコによれば十二あるものの、迫害と同時代に成立したのは一つだけで、イコノクラスムが終了する八四三年以前のものを含めても四作を数えるにすぎないという。しかも、これらの伝記でさえ、主な舞台が帝国領外であったり迫害についてほとんど沈黙した作品が含まれている。どうやら、九世紀も後半になると主人公たちのイコンをめぐる具体的な活動はすっかり忘れ去られていた、というのが実情であったらしい。⁽⁴⁶⁾

もちろん、これら作品群の全体を眺めるならば、聖人たちをはじめ大勢の者たちの輝かしい殉教が話題となっている。とりわけ、コンスタンティノス治下に虐殺された小ステファノスの伝記は、例外的に具体的な記述に恵まれており、聖人の生涯はイコンと深く結び付けて語られている。⁽⁴⁷⁾

きわめて粗雑な概観ではあったが、本章で取り上げた事柄についてまとめてみよう。まず、イコンやイコン崇敬者への具体的迫害ということでは、レオン三世治下には積極的な活動は二、三の例を除いてほとんど確認できない。迫害が絶頂に達したと言われるコンスタンティノス五世の治世についても、七五四年公会議以前には同様に史料は沈黙しており、この会議においてイコンの製造・所持・隠匿・崇拜が異端として処罰の対象となつてからでさえもイコノクラスムの具体的証言は限られているのである。⁽⁴⁸⁾

ところが、七六〇年代に入ると、突如として修道士たちを主な標的とした迫害が激化する。レオン三世下では確認できないこうした修道士への集中的攻撃をどう理解すればいいのだろうか。かつてロシアの研究者を中心に迫害の経済的要因が注目を集めたことがある。広大な所領を経営しながらも免税特権によって守られている修道院は、

国家防衛を最優先する軍事政権によって狙い撃ちにされたというのである。事実、テオファネス年代記などは、コンスタンティノスが修道院を兵士の共有物とし、その結果として首都の有名な修道院が兵舎に改造されたと伝えている。⁽⁴⁹⁾

けれども、七・八世紀頃には大規模な修道院は首都などにごく例外的にしか存在しなかったのである。しかも、主流となっていた一〇人以下の小規模修道院はおおむね短命であり、聖人伝も述べているように、修道士たちはしばしば帝国各地域をさまよい歩くことが多かった。このような修道院であれば、その財産は不動産よりもむしろ動産であったと考えるのが普通であろう。いずれにしても、当時における修道院の土地所有について具体的に述べた史料は見当たらない。⁽⁵⁰⁾

イコンを製作していたのが修道士たちであったから、という理由も受け入れ難い。彼らがイコン製作に携わるようになったのはもっと後であった。⁽⁵¹⁾イコン放棄をかたく拒んだことよりも、年代記がさかんに言及しているのは修道士の禁欲的生活が嫌悪の対象となったということの方である。このような考えは、古代史家P・ブラウンによって、イコンクラスムとはイコンや聖人といった地方的な聖なる存在への攻撃である、と発展させられる。⁽⁵²⁾

しかし、そもそもコンスタンティノス五世の治世のごく限られた数年間にのみ見られる激しい修道士弾圧を、単純にイコンクラスムが原因であったと結論付けてよいのだろうか。迫害は公会議で決定された処罰規定を完全に逸脱しており、トラケンオン長官ミカエルの発作的ともいえる弾圧をはじめ、まれに見る激烈さで遂行されている。

このことは、イコン崇敬派の文章であることを考慮してもかなり異常であると言わざるを得ない。やはり、不明瞭なイコンへの攻撃と一時的で暴発的な修道士への攻撃を同一レベルで把握することには慎重であるべきだろう。⁽⁵³⁾

なお、一時的な修道士迫害が及ぼした効果の度合についても、帝国全土という視点から見ればはなはだ疑わしい。七八七年ニケーアで開催されたイコン復活のための公会議において、詰めかけた大勢のイコン崇敬派修道士たちが大きな発言力を持ったこと自体、修道士迫害が不徹底であったことを如実に物語っているのである。⁽⁵⁴⁾

五 おわりに

本稿では、欧米での最新の研究に依拠しつつ、まずイコノクラスム運動の地域的傾向や軍隊との関連の有無、続いて迫害の具体的内容と修道士攻撃の実情についてそれぞれ検討を加えてきた。以下考察から得られた成果をまとめ、今後の展望について考えてみたい。

まず、「イコノクラスムの地理学」や軍隊Ⅱイコノクラスム論については、全くのナンセンスであることが判明した。帝国の東西地域における対立説からは、イコノクラスムとは本来のキリスト教が持っていたオリエント的要素とギリシアⅡヘレニズム精神との衝突の一つで、それはヘレニズム化への反動としてイスラム教の影響を強く受けた小アジアから起こった、そして最終的には、オリエント的要素が払拭されてギリシア文化とキリスト教が融合したギリシア正教が完成する、というより大きな仮説が提示されている。このような説明は論理の一貫性において鮮やかであり、大きな説得力を持っている。けれども、イコノクラスムに関する限り、帝国内のオリエント的要素を確認することは不可能であった。

考えてみれば、イコノクラスムとは皇帝が始めた宗教政策なのである。当時、イコン崇拜を公然と非難する主教たちが一部に存在したとはいえ、この論争に関連した迫害は全て皇帝の座する首都に端を発している。それゆえ、

運動は何よりもまず首都コンスタンティノープルの現象として理解しなければならぬ。それが、イコノクラスムが同じ東方であっても他の三つの総主教座の地域において振るわなかつた最大の理由であらう。⁽⁵⁵⁾

次に、イコノクラスムの実態と修道士迫害についてはどうか。レオン三世および四世、そしてコンスタンティノス五世の治世でもその前半部では、信用に足るような迫害事例は皆無に等しい。ところが、七六〇年代になると一転して厳しい弾圧が修道士たちに加えられた。コンスタンティノスの迫害は明らかに公会議決定の埒外にあり、修道士たちに限らず標的にされた人々への容赦のない処罰は異常なまでの執拗さが感じられる。ただし、イコンそのものの破壊の事実となると、われわれはきわめてわずかな例しか知らず、まして首都を越えた全国規模でのイコノクラスムの組織的追求については一切確認できない。いずれにせよ、修道士集団を何か一つの利害を持った階層とみなすこと自体誤りであるし、⁽⁵⁶⁾彼らへの迫害がイコン崇敬が原因であつたといふ確かな証拠は見当たらないのである。

実は、イコン支持を堅持する修道士たちへの迫害例は存在している。けれども、それらはイコノクラスムの第二局面において発生したものであつた。本稿では第二次イコノクラスムに触れることはなかつたが、これは紙幅上の問題だけでなく、第一局面とは別に詳しく検討する必要がある、との考えにもよつてゐる。迫害は運動の後半では不徹底であつたとしばしば言われるが、その理由の一つとしてイコン擁護色を鮮明にした当時の修道士たちが抵抗のネットワークを形成してゐたことが挙げられる。⁽⁵⁷⁾けれども、だからといって第一局面においても修道士たちはイコン崇敬派であり、かつそれゆゑに弾圧を被つたのだ、と断定するのは早計である。むしろ、それだけに史料を慎重に読まなければならぬ。第一次イコノクラスムを扱つた聖人伝の内、イコン崇敬ゆゑの迫害や殉教を語る作品

にかぎって、この運動終結後の九世紀後半に執筆されていることを改めて明記しておきたい。

ここで本稿の最初に挙げた問題提起にすることにしよう。すなわち、八世紀から九世紀前半を「イコノクラスムの時代」として把握することの意義についてである。無論、筆者はイコノクラスムが存在しなかったとか、単なるエピソードにすぎなかったと主張しているわけではない。イコノクラスムが神学や教会史、そして美術史にとって決定的な画期をなすことに何ら異論はない。今日でも、正教会は復活祭前の大斎節第一日曜を「イコン復活Ⅱ」正教勝利の日」として祝っている。

けれども、イコン論争自体は神学上の問題なのであり、まず何よりも宗教的な危機として捉えられるべき対象である。しかも、イコノクラスムが八・九世紀の帝国の社会・政治面において時代を画するほどの大事件であったかどうかは今もって不明瞭なままであるだけに、なおさらである。前章までの考察からは、むしろ当時のビザンツ帝国をめぐる主要な政治事件においてイコンは従属的な役割しか演じていないようにさえ思われる。にもかかわらず、この時代を「イコノクラスムの時代」と呼んだため、結果として当時の主要諸事件はイコノクラスムとの関連から一元的に論じられる傾向がきわめて強い。具体的な実証を欠く東西対立論などをもとにして、演繹的に導かれる一見合理的な説明が概説書などで取り上げられるとき、そこには明らかにイコノクラスムをもって当時のビザンツ国家や社会を捉えることの限界と弊害が現れているのである。

われわれは一度、八世紀から九世紀のビザンツ帝国について「イコノクラスムの時代」という枠を取り払ってみる必要があるのではないか。イコンをめぐる宗教論争に縛られることなく改めてこの時期を考察するならば、そこにはこれまでに見えなかった研究視角の存在が判明するだろうし、またこの時代が持つ様々な側面での意義を理解

することができるとはなすである。(83)

注

- (1) 正教会の立場からイコンについて書かれた著書に高橋保行氏の三部作、『イコンのこころ』(一九八一年)、『イコンのあゆみ』(一九九〇年)、『イコンのかたち』(一九九二年)(各春秋社)がある。
- (2) 「イコンクラスム」「イコンクラスト」という言葉はすべて「聖なる画像の破壊(者)」という意味を帯びており、中立的な用語とは言えない。一方、「偶像破壊」という訳ではイコン反対派の主張に偏ることになる。以下の用語使用については、本来は括弧が付くべきものとして読んでいただきたい。イコンフェイル(イコンを愛するもの)・イコンドール(イコンに仕えるもの)と「イコン擁護(崇敬)派」などと訳してはく。
- (3) Ostrogorsky, G., *Geschichte des byzantinischen Staates*, 3. Aufl., München, 1963; Vasiliev, A., *History of the Byzantine Empire (324-1453)*, Madison, 1952; Anastos, M. V., *Iconoclasm and Imperial Rule 717-842, Cambridge Medieval History*, vol. 4, 1966, pp. 61-104.
- (4) 和しめたり、主要な文献については次論文の註を参照。Schreiner, P., *Der byzantinische Bilderstreit: Kritische Analyse der zeitgenössischen Meinungen und Urteil der Nachwelt bis Heute, Settimane di Studio del Centro Italiano di Studi sull'alto medioevo*, 34. 1, 1988, S. 319-407 (以下「Bilderstreit」)。
- (5) 宗教学の最新の概説書として、Hussey, J. M., *The Orthodox Church in the Byzantine Empire (Oxford History of the Christian Church)*, 1986, Oxford; Beck, H. G., *Geschichte der orthodoxen Kirche im byzantinischen Reich (Die Kirche in ihrer Geschichte)*, Göttingen, 1980 (以下「ホムス」)を参照(以下)。
ただし美術史については、その古典的著述の Grabar, A., *L'iconoclasme byzantin, Dossier archéologique*, 1957, Paris, 2nd éd., 1984, を参照してはく。
- (6) Gero, S., *Byzantine Iconoclasm during the Reign of Leo III*, 1973, Louvain (以下「Leo III」); idem, *Byzantine Iconoclasm during the Reign of Constantine V*, 1977, Louvain (以下「Constantine V」); idem, *Notes on*

- Byzantine Iconoclasm in the Eighth Century, *Byzantion*, 44, 1974, pp. 23-42; idem, Byzantine Iconoclasm and Monachomachy, *Journal of Ecclesiastical History*, 28, 1977, pp. 241-248 (以下『Monachomachy』)。以下主要なもののみ。また次の論文集も重要。Byrer, A. & J. Herrin (ed.), *Iconoclasm (Papers given at the 9th Spring Symposium of Byzantine Studies University of Birmingham, March 1975)*, Birmingham, 1977.
- (7) 例えば、井上浩一著『ビザンツ帝国』岩波書店、一九八二年、九一頁。
- (8) このような傾向は、注(8)に挙げた概説書、そしてそれらに立脚した井上氏の議論で顕著である。
- (9) *Theophanis Chronographia*, Boor, C. de (ed.), vol. 1, 1883, Leipzig (以下『Theophanes』); Nikephoros Patriarch of Constantinople, *Short History*, Mango, C. (ed.), Washington, D. C., 1990 (以下『Nicephoros』)。史書『ゲウギヤ』Schreiner, Bilderstreit, S. 322-332.
- (10) Schreiner, P., *Legende und Wirklichkeit in der Darstellung des byzantinischen Bilderstreits, Saeculum*, 27, 1976, S. 165-179 (以下『Legende』)。
- (11) *Theophanes*, pp. 404, 409-410.
- (12) *Liber Pontificalis*, ed. L. Duchesne, vol. 1, Paris, 2nd. ed., 1955, pp. 403, 20-25 (租税) 404, 9-11 (ペロト) ; Schreiner, *Legende*, S. 165-166.
- (13) 以下の議論の主な参考文献は Speck, P., *Kaiser Konstantin VI, 2 vols.*, 1978, München (以下『Konstantin VI』), S. 56-63; Kaegi Jr., W. E., *The Byzantine Armies and Iconoclasm, Byzantinistavica*, 27, 1966, pp. 48-70, esp. 52-53. また「テマヤテマヤ反乱については拙稿「テマヤ反乱とビザンツ帝国——「テマ」システム」の展開——」『西洋史学』一四四号、一九八六年、二二—四〇頁、同「テマからテマ制へ——テマ制度の成立時期をめぐって——」『待兼山論叢』二二号(史学篇)、一九八七年、二九—五〇頁、を参照。
- (14) 突然の反イコン宣言の直接の契機として、年代記はエーゲ海での火山の大噴火を皇帝がイコン崇拜への神の怒りと解釈した、という点で一致しているが、これに至る経緯は全く不明である。イコノクラスムの起源をめぐるは、イスラム教、とりわけウマイヤ朝のヤズィード二世によるイコノクラスムとの関係、またこれに関連してユダヤ人の陰謀説、さらには単性論をはじめとするシリア地方の異端とレオンとの結び付きなどが盛んに議論されてきた (cf. Bar-

- nard, L. W., *The Graeco-Roman and Oriental Background of the Iconoclastic Controversy*, Leiden, 1974)。
 他は『例えは小アジアのイコンタリクスと主教の懸念』(Stein, D., *Der Beginn des byzantinischen Bilderstreites und seine Entwicklung bis in die 40er Jahre des 8. Jahrhunderts*, München, 1980)『禁土勅令発布の年代をめぐる論争』(cf. Anastos, M., Leo III's Edict against the Images in the Year 726-27 and Italo-Byzantine Relations between 726 and 730, *Byzantinische Forschungen*, 3, 1968, pp. 5-41)。
 (15) *Theophanes*, p. 405.
 (16) *Nicephoros*, pp. 57-58. ニケフォロスは「住民」が蜂起したと表現してゐるが、この年代記では「テマ」という用語を避ける傾向があり、このことは通説であり反乱はテマによるものと解して置く。また、実際に皇帝軍と戦つたのはテマの艦隊であった。cf. Bury, J. B., *The Hellenicoi, English Historical Review*, 25, 1892, pp. 80-81.
 (17) Ahreweiler, H., *The Geography of the Iconoclast World, Iconoclasm*, pp. 21-27, esp. 23; cf. Gero, *Leo III*, pp. 94-95; Schreiner, *Bilderstreit*, S. 361-363; Baldwin, B., *Theophanes on the Iconoclasm of Leo III, Byzantion*, 60, 1990, pp. 426-428. この反乱と関連して、レオンのイタリブへの艦隊派遣(七三二/三年)の際の主力が小アジアの海軍テマキビュライオタイであったことを象徴的だとする説があるが、実際にはそれ以外の艦隊がこの反乱の結果、壊滅状態にあつたのである。
 (18) *Theophanes*, p. 415; *Nicephoros*, p. 134. 註「*Speck, P., Artavasdos, der rechtgläubige Vorkämpfer der göttlichen Lehren*, Bonn, 1981.
 (19) *Theophanes Continuatus*, ed. Bekker, I., Boon, 1838, pp. 6-10. cf. Schreiner, *Iconoklasm*, S. 363-364; Kaegi Jr., W. E., *Byzantine Military Unrest 471-843*, Amsterdam, 1981, pp. 265-267.
 (20) *Theophanes*, pp. 465-469. また、八〇三年のメルタネス反乱では「アルメニアコイ以外のアジア側のテマがイコンを容認する皇帝ミタノフォロスに対して蜂起してゐるが、彼らがイコンクラストであつたという記述はなし(*ibid.*, pp. 479-480)。
 (21) *Ibid.*, pp. 450-1, 454, 468, 473, 473-4, 496. テオファネスは八一二年の最後の事件の首謀者のみをイコンクラスト

- トイシ、セドシ、カ。
- (22) *Ibid.*, pp. 461-462.
- (23) *Ibid.*, pp. 442, 461, 462.
- (24) *Ibid.*, p. 462 (*resparata* *Θεωρα*). この語は小アジアのキヤを指してつく著者に用いられた (*ibid.*, pp. 470, 475, 579, 490)。
- (25) Vita Stephanis junioris, in *Patrologia Graeca*, 100, col. 1117C/D. cf. Speck, *Konstantin VI*, S. 58-61; Gero, *Constantine V*, pp. 126-127. *ビ' ヲシ聖人イシロシジヤ' Gill, J., *The Life of Stephen the Younger by Stephen the Deacon: Debs and Loans, Orientalis Christiana Periodica*, 6, 1940, pp. 114-139. 参照。
- (26) 例えば、テオノファネスは、ブラシ攻囲中のヒケーア市でオンスキオン長官アルタウマヌスと魔士の一兵士が聖母のイコンを破壊したと伝えている (*Theophanes*, p. 406 (七十七年))。
- (27) 例えば、七四六年頃、コンスタンティノス五世は単性論派を含むシリヤからの捕虜をトラキアへ強制移住させた (*ibid.*, p. 422)。彼らはトラキアのイコン派を抑えるためのイコノクラストだといふ。これに対して、七五六年頃エーゲ海諸島やギリシア本土などから首都に移住せられた人々は (p. 429) 'イコン崇敬派であり首都の軍隊の監視下に置かれたものだといふ (Anasots, *CMH*, p. 73)。実際には、これらは単純にイコン減少した帝国中枢部の人口回復の措置と考えて何ら不都合はない (Speck, *Konstantin VI*, S. 57)。
- (28) *Theophanes*, p. 405; *Synaxarium Constantinopolitanum*, ed. H. Delehaye, Brüssel, 1902, 877-880; De SS. Martyribus Constantinopolitanis, *Acta Sanctorum*, Augusti, II, Antwerpen, 1643ff., 428-448; Schreiner, *Legende*, S. 169-170.
- (29) *Theophanes*, p. 405; *Georgii Monachi Chronicon*, ed. C. de Boor, Leipzig, 1904, p. 742. cf. Schreiner, *Legende*, S. 168.
- (30) *Theophanes*, p. 409. cf. Schreiner, *Legende*, S. 169; Gero, *Leo III*, pp. 94-112.
- (31) Gero, *Constantine V*, pp. 9-24.
- (32) *Theophanes*, p. 427-478; *Nicephoros*, pp. 142, 144. cf. Gero, *Constantine V*, chs. II, III, V.

- (33) *Theophanes*, p. 432.
- (34) *Ibid.*, p. 442.
- (35) *Ibid.*, pp. 436-437; *Nicephoros*, p. 154.
- (36) *Theophanes*, pp. 437-438, 443; *Nicephoros*, pp. 156, 158-160. 井上浩一氏は、反対派が支配階級の最上層部でもあつた問題が必然的に政治的性格を帯びたと述べているが、『ゴサンツ帝国』八七—八八頁、異常なまでの嚴罰からは、事態はイコン問題を越えるほどに深刻であつたような印象を筆者は受ける。
- (37) *Theophanes*, pp. 437-38; *Nicephoros*, p. 154. ちひび『小ステファンヌス』(col. 1160)によると、聖人が首都に被獄されたとき、そこには帝国各地出身の修道士三四〇名があり、彼らの大半が目・鼻・耳をなくしてあり、手のなつたものもつたもの。
- (38) *Theophanes*, pp. 445-446.
- (39) *Ibid.*, pp. 488-9, 496-7, Schreiner, *Legende*, S. 174-175, 178.
- (40) Mansi, J. D., *Sacrorum conciliorum nova et amplissima collectio*, Firenze, 1766, vol. 12, pp. 184D-185A, 189C.
- (41) *PG.*, 100, cols. 1120CD, 1172AB; Gero, *Constantine V*, pp. 112-114.
- (42) *Theophanes*, p. 443; *Nicephoros*, 86. pp. 160, 162. イコンクラスム以前のイコンが現在ほとんど残つてゐないのは、事業のほかに有力な反証とならなかつたからである。
- (43) *Theophanes*, pp. 449 (巻第十七). 453 (帛書).
- (44) Papadakis, A., *Iconoclasm: A Study of the Hagiographical Evidence*, Ph. D. Dissertation, Fordham Univ., 1968; Huxley, G. L., *Hagiography and the First Byzantine Iconoclasm, Proceedings of the Royal Irish Academy*, Section C, vol. 80, 1980, pp. 187-196.
- (45) Beck, H. G. *Kirche und theologische Literatur im byzantinischen Reich*, München, 1959, S. 506-514.
- (46) Ševcenko, I., *Hagiography of the Iconoclast Period, Iconoclasm*, pp. 112-116 (『新殉教者ロトヌス』) (ed. Peeters, P., *Analecta Bollandiana*, 30, 1911, pp. 393-427). 『シマテマ主教エトハニス』(*Acta Sanctorum*, Junii, 7, 167-172) 『サマナーチオン修道院長ブリュンクの帛書文』(*PG.*, 99, cols. 804-850) 『小ステファンヌス

- 14] (*ibid.*, 100, cols. 1069-1186)).
- (47) Ševčenko, op. cit, pp. 120-121; Huxley, G., On the Vita of St. Stephen the Younger, *Greek Roman and Byzantine Studies*, 18, 1977, pp. 97-108.
- (48) Gero, Monachomachy, pp. 242-243.
- (49) *Theophanes*, p. 443. 月の羅字' 井ノ羅字' 氏ノ羅字' 乃ノ羅字' cf. Charanis, P., The Monastic Properties and the State in the Byzantine Empire, *Dumbarton Oaks Papers*, 4, 1948, pp. 51-118.
- (50) Schreiner, *Legende*, S. 175-177.
- (51) Gero, *Constantine V*, p. 106.
- (52) Brown, P., A Dark-Age Crisis: Aspects of the Iconoclastic Controversy, *English Historical Review*, 88, 1973, pp. 1-34. cf. P. Henry, What was the Iconoclastic Controversy about?, *Church History*, 45, 1976, pp. 18-29.
- (53) Gero, S., Monachomachy, pp. 241-248.
- (54) Hussey, *The Orthodox Church in the Byzantine Empire*, p. 47.
- (55) Speck, *Konstantin VI*, S. 58.
- (56) Ringrose, K., Monks and Society in Iconoclastic Byzantium, *Byzantine Studies*, 6, 1979, pp. 130-151, esp. 134-135.
- (57) 月の羅字' 乃ノ羅字' 種々故めい論じた。cf. Alexander, P., Religious Persecution and Resistance in the Byzantine Empire of the Eighth and Ninth Centuries: Methods and Justifications, *Speculum*, 52, 1977, pp. 238-264, esp. 246ff. 月の羅字' 乃ノ羅字' 第二期でも、イコノクラスム修道士は存在して居る。
- (58) 例えは、この時期に固有のテーマの反乱からの視点。宗教問題においても、イコノクラスムの休止期を騒がせたコンスタンティノス六世の再婚問題(いわゆる「不義」論争)や教会問題への皇帝の介入、そして修道士弾圧など、皇帝権と教会との関係一般についてイコノクラスムの枠を越えた考察が求められる。
- (本稿は、平成三年度文部省科学研究費補助金(奨励研究A)による成果の一部である。)(文学部助手)